7) 食事指導からみた小児献立の必要性について

国立岩木療養所
山田静子　高柳恵美子
6療棟スタッフ一同

＜目　　的＞

当施設においてDMP児の食事は、疾病や年令にかかわりなく同一献立で給食されている。毎日の食事指導を通し、副食献立によって主食摂取量が左右される傾向が著るしく、摂取量の増加をはかる為に、栄養士の協力を得、子どもの嗜好を取り入れた献立を作成し、同一献立との主食摂取量を比較検討してみる。

＜対象並びに方法＞

1．対象はDtypeより（表1）の通りサンプリングした。

表1　　S50年7月現在

グループ別	年令（才）	障害度	人　数
1	8～9	1 2	8
Ⅱ	13～14	Ⅱ 7	8

2．方　　法

① 小児献立を設定。（給食の都合により、月3～4回の通算30回）

② 期間はS50年7月21日～S51年2月20日迄の7ケ月間実施

③ 三度の食事の中で昼食の主食摂取量に焦点をしぼった。

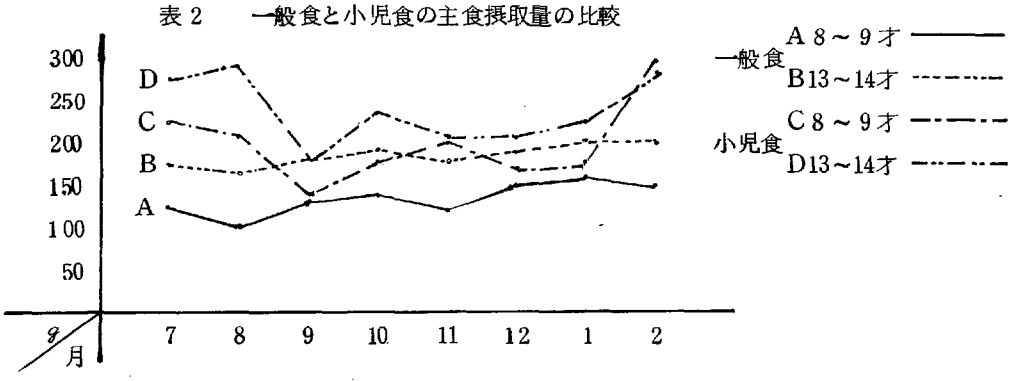
○ 1日献立の中で昼の副食に重点がおかれ、バラエティーに富んでいる。

○ 人員的によく観察できる。

④ 小児献立についてのアンケートを実施

＜結果・考察＞

表2　一般食と小児食の主食摂取量の比較



小児食と一般食の主食摂取量の比較は（表－２）に示す通りですが、副食にボリュームがあり、摂取量が下降している面がみられる。

しかし、一般食に比べると主食摂取量は明らかに増加をみた。又、アンケートによると、小児献立については100％の希望率で、その具体的内容としては、意見を献立にとり入れてほしい（80％）、味つけ、盛りつけをもっと工夫してほしい（20％）との結果が得られた。

以上の事から、季節的な事をふまえ定期的に綿密なる嗜好調査の実施。子ども達の摂取状況を正確に把握する。食事指導を通して偏食予防対策、行事食をとり入れた調理方法、おやつの兼ね合わせなどを考え、子ども達の意向をとり入れた小児献立の必要性を感じた。

しかし、給食の現状では小児食の必要性は認められているが、実施するには時間を要するので一つの打開策として、日課より派生する食事の時間的要素をふまえ、おやつとの兼ね合わせが考えられる。今後おやつを夜に移行し、更に食事との相関関係などについて追求したい。

3）ジストロフィーマウスにおける筋疾患の発現、進行と栄養条件との関連

国立栄養研究所
山口迪夫　新関嗣郎　田村盈之輔
東條仁美　宮崎基嘉

＜目　　的＞

著者らは先きにリノール酸エチル添加ビタミンE欠乏飼料をモルモットに給与し筋ジストロフィーの近似所見を発現せしめたが、本研究では同様な飼料をジストロフィーマウスおよび対照マウスに給与し、その影響の差異から筋ジストロフィーに関する代謝異常と栄養学的要因との関係を明らかにすることを目的とする。

＜方　　法＞

ジストロフィーマウス（C57BL／65－dy／dy、dy区）と対照マウス（C57BL／65－＋／?、対照区）の雌雄合計31匹を用い、リノール酸エチル0.5％を添加したビタミンE欠乏飼料および同E添加飼料を給与し28時間飼育した。飼育期間中に死亡した個体を含めて屠体脂質の脂肪酸組成および蛋白質中のアミノ酸組成、特にN^{ϵ}－メチルヒスチジン含量を分析した。

＜結　　果＞

体重変化および生存日数は表１に示した。体重は全般的に若干減少の傾向を示し、dy区では初体重が小さいため終体重でも低い値を示した。飼育期間中dy区においてはE欠乏飼料で雄・雌とも全個体が死亡し、E添加飼料では雄は死亡し、雌は５匹中４匹が生存した。一方、対照区ではE欠乏の

検索用テキスト　OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

<目的>

当施設においてDMP児の食事は、疾病や年令にかかわりなく同一献立で給食されている。毎日の食事指導を通し、副食献立によって主食摂取量が左右される傾向が著るしく、摂収量の増加をはかる為に、栄養士の協力を得、子どもの嗜好を取り入れた献立を作成し、同一献立との主食摂収量を比較検討してみる。